OM 探訪 第９回 Guy Atkins 氏

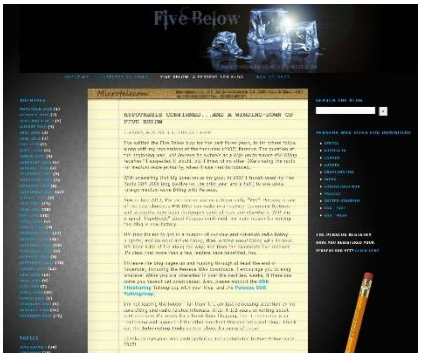
中川　弘夫

「この趣味は確かに独りでも出来るかも知れません。しかし他人と実際に会って話すともっと楽しくなる筈です」。米国で長年 DX 界をリードしてきた実績ある同氏の足跡とその信条を訪ねる。.

Guy Atkins 氏近影
2023 年 6 月、ワシントン州 Grayland での DX ペディションにて

［プロローグ］

連載している「OM探訪」第9回は、初めて海外のDXer、Guy Atkins氏にご登壇頂くことになった。Guy氏についてはアンテナやSDR等ハードウェアに明るい、そしてトロピカルバンドや中波DXに実績を有する実力派DXerとして昔から存じ上げていた。その昔氏がblogを主催しておられた時には連絡を取らせて頂いたこともあったが、実際にお会いしたことは無く、長年遠い存在であった。そんな氏と初めてお目に掛かったのは2019年のIRCA Conventionとそれに続くGraylandペディ。更に2023年のGraylandペディでご一緒させて頂いて、改めてお近づきになることが出来た。



Guy 氏のかつてのブログ “Five below” (2007-2010) Microtelecom Perseus にフォーカスしたサイトであった。

お付き合いはたったそれだけではあるが、その短い時間の中でも氏のDXに関する深い知識と情熱、そして何より人としての誠実さを感じて、この方をもっと知りたいし、日本のDXerに紹介したいと思った。幸い私の申し出を快諾頂くことが出来たので、以下に紹介させて頂きたいと思う。

[Guy氏のストーリー]

Guy氏2歳前の写真。父親のビンテージ無線機 Hallicrafters をバックに。

Guy氏は1956年フロリダに生まれた。父親がミサイルシステムのエンジニアであったことから、NASAケネディ宇宙センターにほど近いところに住んでいた。「幼い頃の記憶として、宇宙飛行士ジョン＝グレンが宇宙に旅立つ瞬間を目の前で見ていました」とのことである。その後父親の仕事の関係で、10の州、15の都市に移り住み、シアトルに定住したのは1980年のことであった。Guy氏がラジオ受信に興味を持ったのは13歳の時であった。少年時代は家族でよくキャンプをしたというが、そんな時にアクティビティの一つとして父親が授けてくれたのが、1台のポータブルラジオ"Airline"だった。父親はチューニングのやり方、そしてどんな局が聞こえるのかを詳しく教えてくれた。技術に詳しい父親は、Guy氏にとって最良の師であったと言える。そうしてラジオに興味を持ったGuy氏は受信趣味を開始したが、最初は普通のBCL同様、HCJB, BBC, Radio Nederland, NHK Radio Japanなどの国際放送を聞いていた。そうした状況は1982年頃まで続き、いわゆるトロピカルバンドを始めとしたDXの世界に入っていったのは、1980年代後半のことになる。

最初の受信機 "Airline"

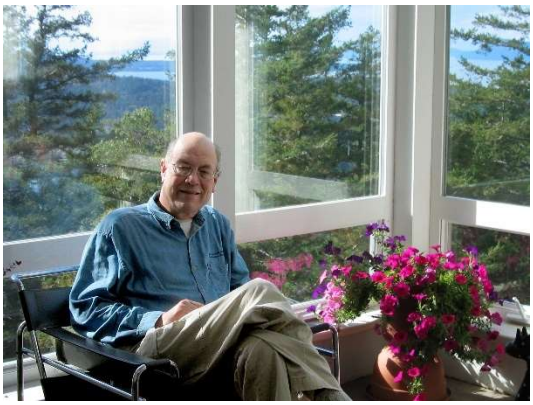
きっかけは結婚した後にSONYのICF-2001を購入したことであった。手頃な金額で周波数デジタル表示、直読が可能な受信機が発売されたことは、多くのBCLをよりディープなDXの世界に引き込むことになったし、Guy氏もまさにその一人だった。世界の地理に、文化に興味を持ち、そして国際放送から国内向けの放送に興味を持つようになっていた時でもあった。中でも東南アジア、インドネシア、アフリカ、PNGなどの「音楽」への興味が、Guy氏をしてDX受信に駆り立てることになったのである。そうした嗜好が高じて、Guy氏はシアトルにあるアフリカ音楽を聴ける店に奥さんと聞きに行った

りもしていたそうである。

その後 Craig Parsley 氏が主宰するシアトルを中心としたクラブである Cascade Mountain DX Club に入会するが、Craig 氏の関心が他に移り Guy 氏がその運営を引き継ぐことになった

SONY ICF-2001

ここでは 2 週に 1 回会誌を発行していたが、Guy 氏はその後クラブ名を DX-Northwest に改名し、シアトルのみならずオレゴン、ブリティッシュコロンビア等エリアを拡大して広くメンバーを募ることになった。そうして DXer として活躍していた Guy 氏を Fine Tuning に招いたのは、後に盟友となる John Bryant 氏であった。John 氏は元々はオクラホマの出身であったが、当時すでにワシントン州　Orcas island にセカンドハウスを保有しており、その関係で DX-Northwest に入会したいとアプローチしてきたそうである。



オルカス島のセカンドハウスで寛ぐ John Bryant 氏
設計は自身で行った

最初に会った時から、John 氏とは嗜好が大変合っていた。アンテナ、ラジオの改造、そしてローカル局の音楽を聴くことである。以来 John 氏が不慮の事故で亡くなる 2010 年までの 20 数年間、二人は歳の離れた親友として同じ趣味を楽しんだ。John 氏との沢山の想い出の中で特に印象深いものについて尋ねると、1991 年にシアトルのワシントン州立大学で行われた John 氏の講義に参加したことを挙げてくれた。John 氏は建築学を教えるオクラホマ州立大学の教授で、日本の建築についても大変造詣が深い方であった。普段はラジオ仲間として接している友人が大学の教壇で教えている～しかも学生はその講義を大変熱心に聞いているのを見て、大変感動したとのことであった。

1990 年代の Grayland ペディ　向かって左より: David Clark, Jean Brunell, Chuck Hutton, Bruce Portzer, Guy Atkins, Nick Hall-Patch, Craig Siegenthaler, John Bryant の各氏

1990 年 2 月に同氏と行った Grayland ペディは、Guy 氏にとってはこれが初めての本格的な中波 DX のペディションであったが、2000 フィートのビバレージアンテナを張り、コンディションは大変素晴らしく沢山の局が受信出来た。そしてそのログを John 氏が美しい手書きで書いているのがとても印象的であった。また夫婦で Sun Juan（Orcas）island に John 夫妻を訪ねた時のことも印象深い。Guy 氏は John 氏を通じて大勢の DXer と知り合うことになり、1986 年に Fine Tuning の一員になった。そして Proceedings の共同編集者に指名され、その職を務めることになった。

Fine Tuning （1988～1995）全 6 冊

ここで Fine Tuning について触れておくと、Fine Tuning は顔を突き合わせて集まる DX Club ではなく、会誌で繋がるメンバーシップである。そしてここはオープンな会員募集ではなく、既存会員の招待でメンバーに加わる仕組みであった（のちに Ozark Mountains DX Club と合流した後はオープンなメンバーシップに移行）。Proceedings は 1988～1995 年までの 8 年間で 6 冊が刊行されている。商用インターネットの開始は 1990 年であるので、今ほどネットが利用できなかった時代であろう。その時の苦労について尋ねると「一つ目はコミュニケーションを取るのが大変であった。当時はまだ電子メールを使っていない人もいたので、電話が中心となったが、電話料金も高額になった。もう一つはレイアウトの問題で、タイプライターから DTP に移行するまでは特にグラフィックを追加するのに苦労した」。Editorial Review Board による Proceedings の編集過程は相当なタフな作業だったと思う。記事を全てチェックし、納得行くレベルに達するまで書き直しを要請しなければならないからである。しかしそこでも John 氏がイニシアチブを発揮し、何度も記事の校正をお願いし、執筆者もそれを理解し根気強く記事を修正していったそうである。軋轢も発生しかねないシーンだが、それも John 氏の強力なリーダーシップがあってこそである。

ところで Proceedings の最終号となった 1995 年版の中では、今号をもって一旦無期限停止することが書かれている。著者一同も働き盛りの年代であり、家族の介護、子供の世話などで、あれだけの書籍を作る時間が割けなくなったのだ。

AR7030+LCD-B&W-Reverse：Guy 氏の最近の DIY プロジェクトの 1 つ。AR7030 Plus の LCD ディスプレイの交換

ただ同時に Guy 氏が語ったのは、インターネットの出現が、Proceedings が再刊しなかったことの理由の一つであろうということである。膨大な情報を瞬時に提供・入手出来るメディアの出現で、こうした書籍に対するニーズは減少するだろうと思ったということであった。実際この間に趣味も大きく変わり、受信機も AR7030 などのレガシーモデルから SDR に移行した。

また、私は Guy 氏に、1989 年か 1990 年に入会した既存の MW DX クラブである IRCA との関係についても尋ねたが、彼は IRCA のメンバーの 1 人に過ぎず、編集者のような役割を果たしたことは無いとの回答だった。

Guy 氏が良き友人として挙げている他の DXer には、Ultralight DX で著名な Gary DeBock 氏、元 VOA で才能豊かな Bill Whitacre 氏、技術の達人でエースの Nick Hall-Patch 氏。 オレゴン州出身のアクティブループアンテナ実験者の Dave Aichelman 氏、Haida Gwaii（カナダ BC 州）の別荘でのうらやましいロギングで有名な Walt Salmaniw 氏などがいる。

Guy 氏の以前の自宅 Puyallup での DXer の集まりにて。向かって左より: Phil Bytheway, Nick Hall-Patch, Dave Aichelman, Guy Atkins, Gary DeBock, and Chuck Hutton の各氏

珍局受信に関するお気に入りの思い出について尋ねると、Guy 氏は、早朝の 60 メートルの長距離路でチャンネル アフリカを受信したこと、また、ソニー SRF-39FP ウルトラライト（裸足ストック）で UAE のラジオファルダを（わずか 5 分間受信した）と語った。)。トロピカルバンドでインドネシアの RPDT2 Buol Toli Toli を迎えたことも思い出深いです。 もう一つの特別な中波キャッチは、何マイルも内陸にあるワシントン州ピュアラップの前の自宅での RTM サラワク、1476(5) kHz を挙げてくれた。

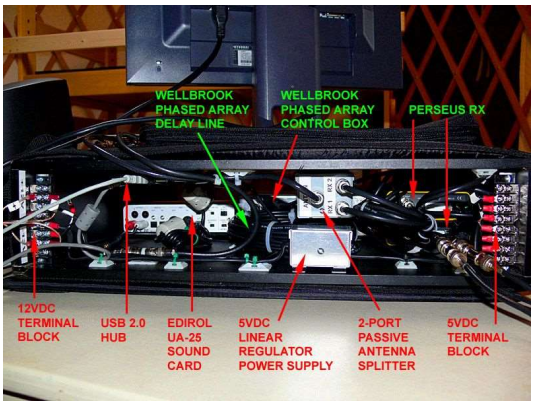
Guy 氏はハードウェアにも強いが、そうした知識をどこで得たのか尋ねたところ、最初の師はやはり父親。そして後は実践で失敗を重ねてラジオを沢山壊しながら身に着けて行ったとのことであった。つまりほぼ独学ということになると思うので、これは素晴らしいと思う。

FlexRadio SDR-1000 に自作ハイパスフィルタ/ローパスフィルタ、及びサウンドカードを組み込んだもの。こうした芸当が可能な技術力を有する

学校でも特にそうした専門分野を勉強したことはなく、仕事も全く分野が異なる。ちなみに職歴は 1977 年にモンタナでの広告会社に勤めたのを皮切りに、最後は 17 年間勤

めた T-Mobile まで一貫してグラフィックデザインの仕事に従事していた。特に T-Mobile 本社(Bellevue, Washington)では Senior Graphics Designer を勤め、とてもやりがいのある仕事だったと回想している(2022 年にリタイア)。

2008 年当時の標準的な Grayland ペディ用機器



上記背面。様々な機器がラックマウントに配置されている

さてこの趣味を続けて行くことの良さを尋ねると、自分が興味を持って色々研究する限りは、楽しむネタは尽きないということだと返答してくれた。それは Ultralight 然り、SDR 然り、インターネットで調べれば何でも調べられる。

ところで BCL という趣味は残念ながら衰退の一途を辿っているが、そこに対してどんな点に楽しみを見出すかについて尋ねると、AI を DX にどのように応用するかではないかと語ってくれた。具体的にはノイズレベルすれすれの局を確認するのに、またアンテナで位相合成を合成するのに役立つと思うと例示してくれた。NDB も面白い分野でトライしたい。

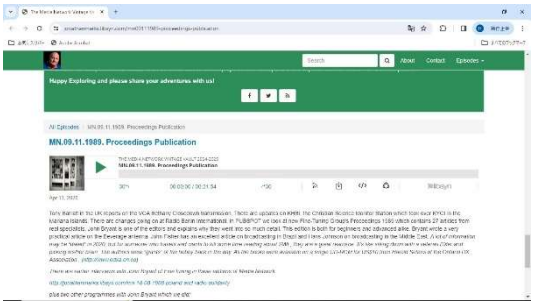
日本に対しては大変興味があるが、これまでのところ海外に旅行したのは 1993 年のクックアイランドのみだそうである。日本の DXer と会うことには興味があるし、無線機メーカーの工場にも行ってみたいし、秋葉原にも行ってみたい。日本の海岸線で DX をするのも面白そうです。

日本の DXer へのメッセージを求めると、言葉やその他の壁はあるが、興味関心の対象は同じなのだからもっと交流しようと言ってくれた。確かに孤独でも出来る趣味ではあるが、出来る限り直接人と会って話す方が良いと思う。ペディでも、飲み会でも、ただ話すだけでも楽しい筈だ。そうした意味でも皆さんの“PROPAGATION”は、仲間を鼓舞するのに大きな役割を果たしていると思います。

[エピローグ]

今回は Guy 氏の特集であったが、併せて氏の親友であった John Bryant 氏のことにも触れさせて頂いた。それは～これも私の想いではあるが～同氏が私にとって初めての海外の DX フレンドであったからである。John 氏とは 2005 年にネットで知り合った。Glenn Hauser への私の投稿を見つけてメールをくれたのがきっかけだった。オールナイトニッ

ポンだったか何か、日本のラジオ放送に関する問い合わせだったと思う。その後メールで文通させて頂くことになったが、John 氏は親日家でありまた極めて紳士な方であり、拙い私の英語も誉めて勇気づけてくれた。そんなことから私は氏を尊敬し親しみを感じて、いつかは実際にお目に掛かりたいと思っていた。しかし前述の通り、同氏は 2010 年に不慮の事故で亡くなり、氏と直接会う機会は永遠に失われてしまった。しかし Guy 氏にインタビューを通じて、改めて John 氏の人となりについてもお話を聞くことが出来た。またこれも Guy 氏が送ってくれたのだが、R.Nederland の Media Network に John 氏が登場した時の音声を送って下さった。それにより私は、同氏の声を聴くことが出来た。そんな訳で今回の OM 探訪は 2 人の OM について記したとも言える。



John 氏の声が聴ける MN のアーカイブ

Guy氏と知り合って、通ずるものがある人は言葉を超えるのだと思った。私がNickさんやGuyさん、そしてJohnさんを慕うのは、やはり人として尊敬するものがあるからであろう。DXへの深い造詣、知識、情熱、そして紳士的な言動、誠実な対応～これらは日本の仲間と全く同じである。あと10年早く知り合えていたならという思いはあるが、それでもこうして間に合って知り合えた以上は、これからも末永く同志としてお付き合いさせて頂きたいと思っている。

ワシントン州 Sequim の田舎道に立つ VOA のロードサインのそばでたたずむ Guy 氏。ここには 1950 年代に VOA の送信所が建設される筈だった。しかし米国議会で予算が否決され、このプロジェクトは中止になった

2024年6月に開催された、Graylandペディでの一コマ。 向かって左より:Nick Hall-Patch, Guy Atkins, 私, Tom Rothlisbergerの各氏